

# 献辞

渡邊和俊先生は、昭和25年11月17日に大阪市にお生まれになり、昭和48年3月に甲南大学経営学部をご卒業されました。その後、神戸大学大学院経営学研究科に進学し、昭和53年3月に博士課程を単位取得満期退学されました。同年4月に、松山商科大学（現松山大学）経営学部に着任。昭和56年4月、甲南大学に助教授として着任し、昭和61年4月、教授に昇進されました。平成31年3月で定年を迎えられましたが、この間、教育、行政、研究の三面で活躍されてきました。

渡邊先生は、甲南大学において、38年に及ぶ長期にわたって、学生の教育と後身の指導に努力を傾けてられました。学部においては、工業経営論、専門演習、基礎演習等をご担当され、また、大学院社会科学研究科経営学専攻においては、工業経営論特論、工業経営論特殊講義、工業経営論特殊研究、演習等を担当して、多数の学生の人材育成に貢献されました。

また、渡邊先生は、甲南大学において、各部局長の管理職を歴任し、甲南大学の発展に尽力されました。平成8年4月から平成10年3月までは学生部長、平成10年4月から平成13年3月まで就職部長（現キャリアセンター所長）、平成15年1月から7月、続いて、平成17年4月から平成24年3月までEBA高等教育研究所長、平成27年4月から平成29年3月まで経営学部長（うち、平成27年4月から平成28年3月までは社会科学研究科長）を歴任されました。甲南学園においても要職を歴任され、その管理運営にも携わってられました。平成12年4月から平成15年7月まで常任理事、平成27年4月から平成29年3月まで理事、平成12年4月から平成15年7月、平成27年4月から平成29年3月まで甲南学園評議員を歴任されました。

渡邊先生は、その研究生活を通じて、工業経営論を中心に経営学の研究に

精進され、数多くの研究成果を発表し、その発展に大きな足跡を残してきておられます。同先生の研究の出発点は、経営経済学（ドイツ経営学）の生産理論にあります。特に、先生が注目されたのは、ハイネン（Edmund Heinen）の学説です。経営経済学において、生産に関する領域の中心となるテーマの一つとして、生産における費用構造を取り上げる経営費用論と呼ばれる領域がありますが、これは原価計算の基礎理論をも形成しています。当時有力であった、企業組織の経済学的考察に立脚したグーテンベルグ（Erich Gutenberg）の議論（B型生産関数）に対し、ハイネンの議論は生産における人間労働の重要性を強調した試みであり、それはC型生産関数と呼ばれています。また、ハイネンは、経済学的分析が中心であった当時の経営経済学において、組織を中心とするより人間的な問題を取り込むことを試みた「意思決定志向的経営経済学」を提唱していることでも有名ですが、渡邊先生の論稿にはそれに対して考察したものも含まれており、そのご研究の成果は『経営生産論』（森山書店、昭和62年）にまとめられておられます。

その後、渡邊先生の研究のご関心は、イノベーションの問題、すなわち、イノベーションが製品化され、経営成果に結びつく過程に焦点を合わせたものになりました。同先生の多岐にわたるそのタイプの議論の学説研究を通じて、例えば、技術開発の進展と企業成長の関係に関する研究や経営資源論に立脚した革新的な技術を製品化し得る組織能力を重視するタイプの研究について、その研究動向を我々は展望することが可能となっております。

以上のように、渡邊先生は工業経営に関するドイツ語圏、英語圏における多くの議論の研究を続けてこられました。諸学説を、精緻に、そして真摯に理解し、適切に論評する、そうした渡邊先生の研究に向かわれる姿勢は、若手研究者にとっても範とすべきものであり、学会でもそのような高い評価を受けられております。

渡邊先生は、研究者としても教育者としても、甲南大学経営学部の教員の

模範として長く記憶されることを確信し、ここに本論文集を捧げたく存じます。先生のこれからのご多幸とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

甲南大学経営学部長

甲南大学経営学会会長

三 上 和 彦